

# あんげろす

やはり数が重要？

久保田 浩

ヨーロッパ社会の脱教会化の趨勢は顕著であるが、ドイツもその例外ではなく、1960年代末以降、教会の成員数は（東西統一で全人口が増加した時期を除くと）右肩下がりの傾向が続いている。2021年末には、ローマ・カトリック教会とドイツ福音主義教会（EKD）傘下のプロテスタント諸教会の成員総数がはじめて、全人口の半数を下回った（それぞれ26.0%、23.7%）。

正教会とEKDに所属しないプロテスタント諸教会を含めればまだ半数を超えるものの、昨年このニュースが報じられた時、両教会には動揺が広がった。東西統一後の時点でまだ6割近くを示していた数値がとうとう5割を切ってしまったのである。そして今年になって、22年のEKDの教会員数の減少率が2.9%になったと報道され、動揺は衝撃に姿を変え、EKD指導部では急遽今年から「洗礼の日」を定め、数値の回復に躍起になっている。

教会員数の統計上の減少は、新規受洗者数を逝去者数が上回っていること、非キリスト教徒の人口割合が増加していることよりも、教会離籍率の増加に起因している。21年には史上最高値を記録し、その傾向は22年も継続している（ローマ・カトリック教会は21年に1.6%を記録、16年と比較すると倍増、EKDは21年に1.4%、22年に1.9%）。EKDでは22年には離籍者数が逝去者数を上回るという事態が生じている。離籍者が増加している一因は、教会税の支払いが生計を圧迫しており、教会員が「費用対効果」を勘案した結果、離籍へ促されているという指摘もある。

キリスト教徒の数が1%程度の日本社会に生きていと、「洗礼の日」や「費用対効果」などを語るといこと自体が、贅沢な話であり、つくづく西洋的現象であると感じてしまうが、それ以上に痛感させられるのは、少数派の保護を喧伝する両教会が、自ら少数派になることに極度の不安感を示していることである。

くぼた・ひろし（所長）

第91号

2023年7月



## 『松山高吉史料選集』余滴

嶋田彩司

松山高吉(1847～1935)の明治二十(1887)年の日記、十月十七日に次のような記事がある。

午後五時、千歳ニテ余ト森本ノ為ニ靈南坂教会員送別会ヲ披ク。上州松井田ノ畑中氏夫婦並ニ勝氏ノ内田姉モ来会ス。津田仙氏モ来ル。凡テ三十人余。…

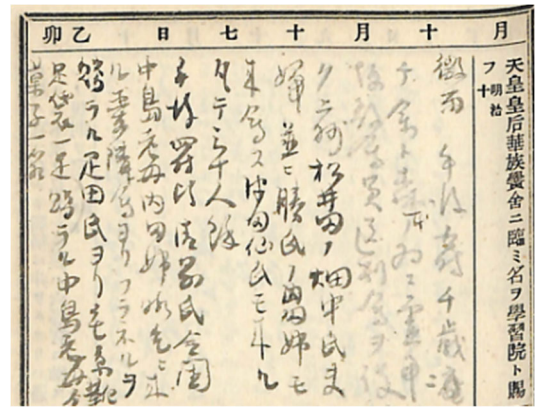
高吉が聖書翻訳の職責を果たし、二年余の京浜滞在を切り上げて、平安教会牧師就任のため京都に赴くに際しての送別会の記事である。文中「森本」とあるのは松村介石で、彼もまた警醒社の編集職から山形英学校へ転身するタイミングにあった。

さて、記事中で注目すべきは「内田姉」であろう。「勝氏ノ」と書かれていることから、この来会者は勝海舟の長女内田夢(1846～)であると特定できる。夢は結婚して内田姓を名乗ってはいたが、勝邸敷地内に住まっていたようだし、彼女自身クリスチャンでもあったので、いわば勝家の名代として信徒による送別会に顔を出したものと思われる。さらにいえば、日記の後半には「疋田氏ヨリ…足袋一足贈ラル」ともある。この記述だけでは確定できないものの、餞別の贈り主が疋田孝子であれば、これも勝家関係者(海舟次女)ということになる。

では、松山高吉と勝家との接点は何であったか。

高吉側の資料から推測するかぎり、それは彼がホイットニー家で説教に招かれていたことに求められるようである。

ホイットニー家とは、ウィリアム、アンナ夫妻にウィリス、クララ、アデレードの一男二女の家族をいう。一家は明治八年に来日したが、さまざまな手違いによって生活費にも窮する状況だった。これに救いの手を差し伸べたのが勝海舟で、金銭的な工面にとどまらず赤坂の広大な屋敷の一面を居住地として提供したりもしている。



このホイットニー邸に高吉が赴き、説教をしていた。彼の説教・講演録『聖書講義並演説』(『松山高吉史料選集』第一巻)や日記(同第五巻所収予定)によれば、最初の訪問は明治十八(1885)年一月四日で、その後同年中に4回、十九年には15回、二十年に6回の訪問記録がある。聖書翻訳や讃美歌編纂のスケジュールに左右されてのことであろうか、訪問は不定期で、5週連続ということもあれば、数ヶ月の間が空くこともあるが、ただしすべて日曜日で、時間帯は夕方から夜である。

明治二十年のホイットニー家は、父ウィリアムが明治十五年にロンドンで客死し、その妻アンナも翌十六年に四十九歳で病没していて、子どもたちの時代となっていた。長兄ウィリスは赤坂病院(現赤坂教会)における医療奉仕に注力しており、日曜定例の勉強会は長女のクララが仕切っていたようである。そこへ高吉が招かれた。内田夢や疋田孝子はクララたちに影響されて入信しているので、その席にふたりがいたこともほぼ確かであろう。

この会で高吉が説教をするようになったきっかけについては不明である。ふつうに考えれば、高吉の周囲の仲間の紹介、推薦があつてのことかと推測される。たとえば、この頃高吉がもっとも親しく交わりをもったひとりである小崎弘道に関連して、クララの日記の明治十六年六月の条には、

小崎(弘道)氏は日曜の夕方ここで説教した。集会の前に話しあつた時に、彼は勝氏が母の生涯と、その静かな臨終に示されたキリスト教に非常に感銘をうけ

たという話をなされた。(中公文庫『勝海舟の嫁 クララの明治日記』下、486頁)

と書かれている。彼もまたホイットニー家での日曜夜の集会の講師であったわけで、そのようなことがきっかけであったのかもしれない。

また、高吉がどのような説教をおこなったのかについてもくわしくは分からない。彼の記録には、ここでは一例のみあげるが、

神ニ任セヨ ペテロ前五ノ七 ○十一月一日夜ホイットニー家ニテ講ズ 渡り鳥ノ論

などと題目等がかんたんに記されるのみである。

一方、クララの日記にも松山の記事はない。そもそもクララの日記は明治十七年十一月から途切れており、それ以降はたった一度、明治二十年の四月、母アンナの命日に長男を伴って墓参したことが記されるだけなので、高吉が説教に通っていた頃、残念ながらクララは日記からすでに遠ざかってしまっていたといえる。

乏しい情報のなか、私はホイットニー家での集会において、高吉がどんな表情で、どんな口調で説教していたのだろうと想像する。そして、内田夢やクララたちはどんな面持ちでそれを聞いていただろうかと考える。おそらく高吉はいつもどおり訥々と自らの信仰を語ったのであろう。松山高吉研究者溝口靖夫氏がいみじくも「武士気質」と評されたように、『史料選集』の編纂をとおして浮かび上がる高吉像は、江戸の教育をたたきこまれた者らしく、めったに感情をあらわにすることなく、与えられた責務を誠実にこなすことを旨とする寡黙な人物である。説教においても、おそらく彼は派手なパフォーマンスにもっとも縁遠いタイプであっただろう。にもかかわらず……私ほうえに彼の明治十九年のホイットニー家訪問を15回と書いたが、じつはこれ以外に木曜や土曜を中心に開催された「愛隣会」なる集まりを合算すると21回にもものぼる。つまり一月に2回近いペースでクララたちは高吉を招いていたのである。

そして、この間にクララは勝海舟の三男で四歳下の梅太郎と結婚し、出産した。というか、妊娠して後に結婚して出産した。子育てのたいへんさに加えて、外国人の女性が結婚前に妊娠したことが好奇の目でみられたともいわれている。そんな心身両面にわたる苦勞のなかで、クララは松山の話聞いていた。

高吉の話はクララの胸にどのように響いたのだろうか……あるいは高吉の口数すくない信仰の姿が、このときのクララにはかえって安心だったのかもしれないなどと、彼の原稿を整理しながら思ってみたりする。

しまだ・さいし (所員)

## Home

三野和恵

By yon bonnie banks and by yon bonnie breas,  
Where the sun shines bright on Loch Lomond  
Where me an' my true love will never meet again,  
On the bonnie, bonnie banks of Loch Lomond.

暗くて長い夜の深まる秋のことだったろうか。場所はスコットランド。エディンバラ市の Grassmarket にある建物だった。Grassmarket Community Project という、チャリティのようでそうとも言い切れない、social enterprise のセンターだ。2013年に竣工した建物は比較的新しく、高めの天井があるホールを備えている。その日は確か月曜で、Open Door Meal という毎週の炊き出しに集まったお客さんたちが、食事を終えてくつろぎながら、舞台に立って歌を披露する我々 GCP Choir を見ていてくれた。炊き出しに来る人々の多くは、貧困やホームレスの状態に置かれているか、そうでなくとも社会的に孤立していて、比較的安心できる環境で他の人々と一緒にいたいのだと思われる。

\*\*\*

2017年の夏、エディンバラ大学神学部での二年間の訪問研究のためにこの街での生活を始めた私の五感には、何もかもが珍しく印象的だった。かつての火山活動で形成された険しく美しい地形と色鮮やかな植物。深く青い空や小高いところから見える海。風に運ばれて漂ってくる醸造所の甘い香りやチップスの油っこい香り。どこからともなく聞こえてくるバグパイプの音色。同時に、街角のあちらこちらで時には一人で、時には愛犬と一緒に座り込み、通りすがりの人々に少しのコインを分けてくださいとお願いする人々の姿が忘れられない。中には少年のように若い子もいて、海外からの移民と思われる若い女性もいる。多くの人は素通りするが、挨拶しながらコインを分けたり、飲み物やご飯を差し入れしたりする人もいる。コインを分けてもらおうと満面の笑みでお礼を繰り返す言ってくれる女性がいる一方で、暗い蒼白な顔で力無くお礼を言う男性の姿に心が締め付けられたこともある。

エディンバラは美しく活気に満ちた街だった。しかしそこは、今までに感じたことのない深い孤独に溢れる街でもあった。夏のフェスティバルの時期には全国どころか世界中の人々が集う芸術と交流の拠点でありながら、誰にも気づかれない場所、そしてあの彼らのように、誰にも気づいてもらえない人々が街の至るところにひしめいているようだった。ひょっとするとこの街に自分のことを投影していたのだろうか。普段はひたすら資料調査や翻訳作業に取り組み、自分の時間と言えばたまにGCP Choirに行く以外は大体一人で街を探索し、できる限り多くの道を歩き回って、その名前を覚え全身に染み込ませようとしていた。極端な日には6時間も歩き続けるなどして、疲れが溜まってそんな風に考えるようになったのかもしれない。だからこそだろうか、見知らぬ人の笑みや、ちょっとした挨拶が宝物のように感じられた。一人でベンチに座っていると、「ライターの火を貸してくれませんか？な

いの？いいのよ、ありがとうね。しっかりね。」と肩に手を置いてくれた女性もいた。大袈裟かもしれないが、私は彼女たちのような人々を心の中で Angels と呼んでいた。

友人の紹介で顔を出すようになった Grassmarket Community Project にも、そのような天使たちがいた。GCP は、19 世紀以来 Grassmarket 近隣のホームレスの人々に奉仕してきた Grassmarket Mission と、これに隣接する Greyfriars Kirk——1638 年の「国民契約」が結ばれた場として著名だ——の協力によって 2010 年に創設された。その始まりは、Greyfriars Kirk 牧師の Richard Frazer 氏の一つのひらめきにあった。かつて世界中に宣教師を送り出したスコットランドでは、キリスト教はもはや主流の宗教ではない。街中にそびえ立つ教会堂の多くは空き家か、バーやレコードショップ、あるいはモスクとして再利用されている。まだ教会として機能しているところでも、信徒は高齢化し、献金も以前のように集まらなくなっているという。打ち捨てられてゆく教会堂、とりわけ pew と呼ばれる信徒席を目にした Frazer 氏は、これをどうにか生まれ変わらせることはできないだろうか、しかも、同じように社会から無用だと見做されてしまっている人々を生まれ変わらせるような何かに、生かすことはできないだろうかと考えるようになった。かくして GCP の最初の事業 Woodwork Team が生まれた。

使用されなくなった pew を木材に、椅子やテーブルや食器を創作する。貧困、非行や病気、障がい、家庭内暴力などの様々な背景のために社会から孤立させられたメンバーが木工技術を磨き、習得する。その結果、資格や職を得るだけでなく、自信を取り戻す。そして何よりも、自分を必要としている場に身を置くことができる。この取り組みは、直に GCP の他の事業をインスパイアし、生み出していった。タータン・テキスタイルを用いた創作活動。併設するカフェでの調理・給仕・経営。生涯学習をコンセプトとする活動も

盛り込まれた。Art、Creative Writing、IT Skills、Guitar  
そして Choir などだ。

これらの集まりには顔を出せば誰もが歓迎された。  
Choir では楽譜を読める人は少数で、仲間の一人は目  
が見えなかった。リーダーは歌詞とメロディーを数小  
節ずつ歌い、メンバーがこれを真似て曲を覚え、最終  
的には全体を通して歌えるまでになった。炊き出し、  
総会やクリスマス祝会などの機会には何曲か披露す  
ることがあった。練習の時にははちゃめちゃなのだが、  
不思議と本番になるといつもパワフルなハーモニー  
を作り出せた。写真を見ると、皆嬉しそうに笑いなが  
ら歌っている。拍手喝采だけではない。リーダーがニコ  
ニコしながら指揮をしてくれて、一曲を歌い終わる  
たびに「Perfect!」「Fab!」と言ってくれるからだったの  
だろう。

\*\*\*

O ye'll tak' the high road and I'll tak' the low road,  
And I'll be in Scotland afore ye.  
Fir me and my true love will never meet again,  
On the bonnie, bonnie banks of Loch Lomond.

Loch Lomond はスコットランドでよく知られる曲の  
ようで、炊き出しに集った人たちも途中から声を出し  
て嬉しそうに一緒に歌ってくれた。互いに深くは知ら  
ない人々が positivity と friendliness、そして何よりも相  
互への respect を通して共鳴し合う出来事の一員とさ  
れたような気がした。私は彼らの名前を知らないし、  
彼らも私の名前を知らないだろう。しかしこの時、深  
い孤独の中で、本当に所属する場所を心の中に宿して  
もらったのだと今でも感じている。

みの・かずえ（客員研究員）

## 雑録

6 月初旬の週末、調査出張で長崎を初訪問した。折し  
も台風 2 号が日本列島を襲い、線状降水帯の影響で航空  
機は降下時に大きく揺れたものの、無事に予定通りの時  
刻に到着することができた。出発前の羽田では小雨が降  
り、長崎駅に到着した後も傘こそさしたが、駅からほど  
近い中華料理店「大八」でちゃんぽんを賞味して表に出  
ると、空は綺麗に晴れて暑かった。全国的に台風の被害  
は甚大であったが、調査をする身にはありがたい好天に  
恵まれることになった。

調査先は長崎原爆資料館である。2022 年に学芸員とし  
て着任した後藤杏さんのご協力を得て、1945 年に綴られ  
た貴重な日記資料を数点、見せていただいた。原爆投下  
の 8 月 9 日に起筆し、凄惨な状況を留める日記もあれば、  
8 月 8 日の記録が最後となった工場日記もあった。目下  
は撮影画像と翻刻データを利用して、それぞれの日記の  
内容を慎重に読み進めている。

この調査は、「1945 年の日記」に関する出版を前提と  
した研究活動の一環として実施した。日本の戦争と敗戦  
の経験を様々な立場の書き手の記述から多角的に検証し、  
一様ではない経験のありようについて読者が日記を「並  
べ読む」ことで学び、考えるような構成にしたいとの狙  
いがある。まもなく戦後 80 年を迎え、経験者不在の時  
代が間近に迫る時期に出版する意味も深く考えたい。

企画する書籍には権利者のありがたいご厚意により、  
妊娠中に広島で被爆した女性の日記を収録できることにな  
っている。このたびの調査は、長崎の記録もぜひ収録  
したいとの思いから実施したものであった。

しかし現地長崎の資料館で調査をおこない、展示から  
改めて被害の大きさに慄然とし、爆心地の碑や被爆遺構  
を訪問して在りし日の姿を想像するにつけ、なぜそもそ  
も真っ先に広島を取材し、長崎があとになったのかとい  
う忸怩たる思いが募ってきた。そもそもどうして、今に  
なるまで長崎を訪れなかったのだろう。

私は東京で育ち、広島を舞台とする「はだしのゲン」で原爆の恐ろしさを知り、修学旅行で広島を訪れた。その後も今日に至るまでそれなりに戦争の学びを深めてきたつもりだった。その実、原子爆弾という史上最悪の兵器の犠牲となった「広島・長崎」が、心理の内奥では悲劇の時系列の並びではなく、無意識ながら想像力の強弱となっていたことを今更ながらに感じ、それに自覚的でなかったことを恥じたのであった。

長崎での自身の被爆と救護活動を記した『長崎の鐘』の著者である永井隆の『平和塔』(アルバ文庫)には、病床の永井を関係者が囲む出版記念会で交わされた、以下のようなやり取りが収められている。

それにしても広島はたいそう宣伝して世界的に有名になったのに、長崎は黙っているから世界の人々から忘れられていると言いつける人があった。するとローマに長く留学していた浦上天主堂の中島万利神父さまが口を開いて、「大丈夫ですよ、世界中のキリスト教徒は長崎を忘れはしません。なぜならここは二十六聖人を初め多くの殉教者を出した聖地であり、今もなお多くの信者が犠牲と祈りとを黙々とささげていますから……世界中の人々がやがて時が来れば、豊かな愛の手を差し伸べて参りますよ」——それを聞いて、みんな明るい顔になった。

(「原子野に伏して」)

引用の冒頭で言われる「宣伝」の多寡はここでは問題にしない。場にいたみなさんが「明るい顔」になったのは、地獄のように耐え難い苦しみや犠牲の経験が当事者以外にも永く記憶され、人々が想像力を働かせて自分たちに寄り添い、理解しようとする事への期待と安心からであろう。「明るい顔」に至るような他者への想像力を強くもちたい。原爆資料館や二十六聖人記念館で見かけた、祈りを捧げる訪日旅行者の姿を思い浮かべながら、そのようなことを考えた。

たなか・ゆうすけ (主任)

研究所活動 (2023年4月～2023年6月)

2023年度アジアキリスト教講義シリーズ (春学期)

(各回 18:40-20:10)

第1回 5/16 (火) 「中国近代知識人のキリスト教理解」

講師：朱海燕 協力研究員

第2回 5/30 (火) 「東アジア近代史とアメリカ宣教政策」

講師：李省展 協力研究員

第3回 6/13 (火) 「キリスト教と音楽 ～ 礼拝音楽比較 (日本とオランダの場合)～」

講師：長谷川美保 協力研究員

第4回 6/20 (火) 「映画とキリスト教」

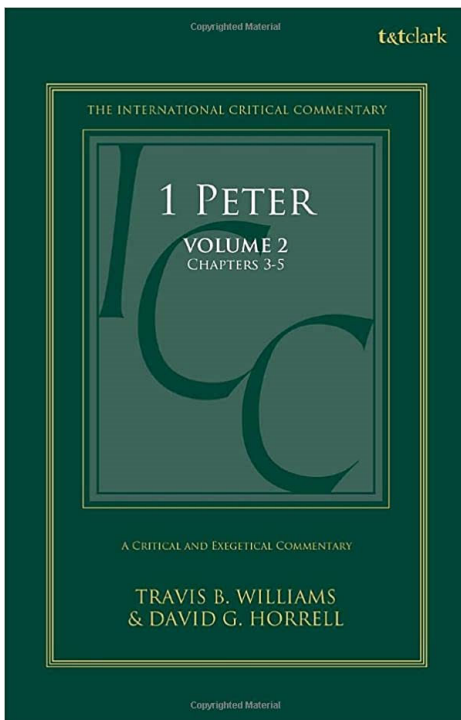
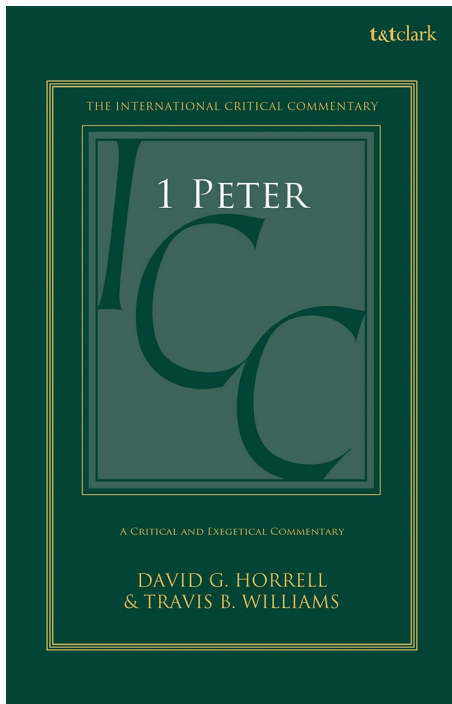
講師：服部弘一郎 (映画批評家)

第5回 6/27 (火) 「アジア神学の課題としての身体」

講師：植木献 所員

新着図書

- ・『福音と世界』No. 4、新教出版、2023。
- ・『福音と世界』No. 5、新教出版、2023。
- ・『福音と世界』No. 6、新教出版、2023。
- ・『立教学院百五十年史 第一巻』立教学院、2023年。  
(立教学院史資料センターよりご寄贈)
- ・『1PETER VOLUME1 CHAPTERS1-2』Williams, T. B 著、Horrell, D. G.、2023。
- ・『1PETER VOLUME2 CHAPTERS3-5』Horrell, D. G. 著、Williams, T. B、2023。
- ・『日本におけるキリスト教フェミニスト運動史 1970年から2022年まで』富坂キリスト教センター編、新教出版社、2023年 (工藤万里江先生ご寄贈)



MEMO

---

あんげろす ΑΓΓΕΛΟΣ

とは、「メッセンジャー」・「天使」の意。

あんげろす 第91号

---

2023年7月10日 発行

明治学院大学キリスト教研究所  
〒108-8636 東京都港区白金台 1-2-37  
TEL:03-5421-5210 / FAX:03-5421-5214  
Email:kiriken@chr.meijigakuin.ac.jp

---

題字：澁谷 浩